

逆境をはねのけて 新たな市場開拓に挑む

栃木県の株式会社Yファーム佐野は、70頭の乳牛にNON・GMO(非遺伝子組み換え)の配合飼料を給与。その生乳は両毛酪農業協同組合へ出荷され、地域消費者に愛されている。昨年は台風被害、今年は新型コロナウイルスによる影響など、経営を取り巻く環境は厳しいが、新たな事業に果敢に挑もうとしている。

海外での学びを活かした 粗飼料自給とカウコンフォート

北海道に次いで、全国2位の生乳生産量を誇る栃木県。県内では5万頭あまりの乳牛が飼育され、年間30万t以上の生乳が生産されている。首都圏の一角でありながら酪農が盛んな理由として、大消費地である東京に近いことや、牧草の生育に適した良質な土壌と水に恵まれている事などの条件が挙げられる。

そんな栃木県の南部、佐野市の株式会社Yファーム佐野では、70頭の乳用牛と35頭の繁殖用牛を管理している。代表取締役の山崎税(のり)さんは1974年生まれ。25歳の時に父が営む農場に就農した。その数年後、Yファーム佐野を含む13軒の農家に

よって構成される両毛酪農業協同組合の組合長に父が就任したのを受けて経営を任されるようになり、2017年に法人化。パートタイマーを含む総勢10名ほどの陣容で、乳用牛と繁殖用和牛、飼料稲や牧草の生産管理を行っている。

高校時代までは農業に就く気はなかったが、山崎さんを後継者にしたいと願う両親の強い思いに応えて酪農学園大学に進学。卒業後、公益社団法人国際酪農者交流協会が主催する海外農業研修に参加してデンマークに赴いた。現在、子牛への哺乳や会社の事務全般を担っている奥様の恵さんとは、同期の研修生同士として現地地で知り合い、結婚に至ったという。

「家族で過ごす時間を楽しむために作業を徹底的に効率化しているヨーロッパの酪農家の姿に感動し、自分もそんな酪農を実践したいと思うようになりました。以前の当農場は粗飼料を全て購入していましたが、研修中に牧草の栽培や刈り取り技術を習得したので、帰国後就農してから、少しずつ自給するようになりました」

現在は農場の近くに計8haの圃場を確保し、ホルスタインと和牛に与える粗飼料の6割を自家生産。飼槽を衛生的なステンレス製のものに変更したり、古いバルククーラーを水タンクに応用して全頭で飲水を均一に供給できる仕組みを作ったりと、カウコンフォートの観点から酪農施設にもさまざまな改良を加えてきた。分娩時の事故を防ぐ

株式会社Yファーム佐野



栃木県佐野市下羽田町649
従業員/10人
飼養頭数/搾乳牛70頭、繁殖用牛35頭



栃木県佐野市下羽田町

Yファーム佐野の山崎税さん(後列右から2人目)、奥様の恵さん(前列右から2人目)、ご家族と関係者の皆さん

ため、分娩・発情監視通報システム「モバイル牛温恵」や分娩房の監視カメラを導入するなど、ICT機器の利活用に対しても積極的だ。

「近く自動給餌機も導入する予定ですが、そうした機器はあくまでも作業負担を軽減するための補助手段に過ぎず、私や従業員が常に個体をじっくり観察しながらケアする事が大切だと考えています」

自然災害に直面しても 前向きな気持ちを忘れない

「安全・安心な牛乳を飲みたい」という消費者のニーズを満たすため、山崎さんは10年ほど前に、ホルスタインに給餌する配合飼料をNON-GMOのものに切り替えた。生産された生乳は全量が両毛酪農業協同組合に出荷され、「酪農家のこだわり牛乳」の商品名で小山市のよつ葉生活協同組合に納められる。

「社会体験学習で農場を訪れた中学生から、『いつも美味しく飲んでます』といった嬉しい声をかけられると、本当にこの仕事に就いて良かったと思います。NON-GMOに信頼を寄せてお求めになる消費者の気持ちに應えるため、牛舎の衛生や生乳の品質管理には常に万全を期すようにしています」

そんなYファーム佐野を、19年に大型台風19号が襲い、牛舎が浸水。搾乳機の手すりやバルク

「A2ミルク」を商品化して 多くの消費者に届けたい

山崎さんには、新たに取り組もうとしている計画がある。それは、「A2ミルク」と呼ばれる生乳の生産だ。牛乳に含まれるタンパク質には、A1タンパク質とA2タンパク質があり、一般的な牛乳にはその両方が含まれる。A1タンパク質は、腹痛や腹部膨満感などを起こす要因となる場合があり、そのせいで牛乳を苦手とする人も少なくない。しかし、ホルスタインの中にはA2タンパク質しか含まない乳を分泌する個体があり、その生乳から生産された牛乳なら、飲んだ人のお腹がゴロゴロするような事を防げるという。

近年海外市場で需要が伸びているこのA2ミルクに、山崎さんは着目した。

「当農場のホルスタインを検査したところ、3分の1ほどがA2ミルクを分泌する個体だと分かりました。その生乳を両毛酪農業協同組合の工場で牛乳にし、近く新商品として販売を開始する準備を進めています。まだ学術的に立証されたわけではありませんが、A2ミルクはさまざまな疾病予防に効果があるとの説もあり、新市場開拓につながる可能性を感じます」

自然災害が多発したり感染症が拡大したりしている今だからこそ、消極的になるより、むしろ「新しい事に挑戦したい」と山崎さんはいう。A2ミ



「社会が停滞ムードの
この時期だからこそ、
新しい何かにチャレンジしたい」

株式会社Yファーム佐野の代表取締役山崎さん



クーラーの冷却装置、堆肥の攪拌機などが壊れたうえ、10頭ほどの搾乳牛が乳房炎に罹患した。

「牛舎が泥だらけになったので、一時的に全頭を別の場所に避難させようとしていたところ、JA東日本



搾乳用器材を高い位置に設置し、浸水リスクに備える

くみあい飼料北関東支店の営業部の皆さんが力を貸してくれ、泥を洗い流してなんとか復旧する事ができました」

大きな損失を出したが、これを貴重な教訓と受け止めた山崎さんは、鉄骨を組んで搾乳用器材を浸水被害に遭わない高い位置に設置し直すなどの対策を講じた。20年には新型コロナウイルスの影響で大半の学校が休校となり、牛乳の給食需要が一時的に停止。相次ぐ災害に見舞われながらも、山崎さんは決してポジティブな姿勢を崩さない。

「学校が休校になった事で、4人の子どもたちが早朝から農場の仕事を手伝ってくれるようになりました。家族が触れ合いながらの農作業は、かつて感銘を受けたデンマークの酪農を思い起こさせます」と、この事態を「家族の絆を強める良い機会」ととらえている。

クの商品化を計画した事で「より良質のミルクを搾りたい」という自身の気持ちが高まっただけではなく、従業員も刺激を受けて、これまで以上に牛のケアや牛舎の清掃などに熱を入れて取り組むようになったそうだ。

一方、経営基盤を安定させるため父の代から行っている和牛繁殖事業についても、これまで進めてきた血統更新を継続し、肥育農家が求める体格や食いの良い子牛を安定的に供給する態勢を強化するという。逆境をもつとしない山崎さんのこうした姿勢は、全国の酪農・畜産関係者に大きな希望と勇気を与えるはずだ。



①地元で愛される「酪農家のこだわり牛乳」（両毛酪農業協同組合）②配合飼料がNON-GMOである事に安心感を抱く消費者が多い ③ふんだんに与えられる粗飼料の大半を自給 ④JA東日本くみあい飼料の担当者とのコミュニケーションも円滑 ⑤分娩・発情監視通報システムなどICT機器を活用した事故防止や生産管理の効率化を推進 ⑥新鮮な飲水を均一に供給する設備を整えるなど、さまざまな角度からカウコンフォートを追求している